

國學院大學學術情報リポジトリ

『楚辭補注』 譯注稿(三十三)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000904

『楚辭補注』譯注稿（三十三）

楚辭卷第四

九章章句第四

〔本文〕

- (1) 余幼好此奇服兮 余^{われ}幼くして此の奇服を好み
(2) 年既老而不衰 年既に老いて衰へず
(3) 帶長鋏之陸離兮 長鋏^{ちやうけふ}の陸離たるを帶び
(4) 冠切雲之崔嵬 切雲^{さいくわい}の崔嵬たるを冠す
(5) 被明月兮珮寶璐 明月^きを被て寶璐^{ほうろ}を珮ふ
(6) 世溷濁而莫余知兮 世は溷濁^{こんだく}して余を知る莫し
(7) 吾方高馳而不顧 吾方^{まさ}に高く馳せて顧みず
(8) 駕青虬兮驂白螭 青虬^{せいきう}を駕し白螭^{はくち}を驂^{そへうま}にし
(9) 吾與重華遊兮瑤之圃 吾重華^{えうわ}と瑤^はの圃に遊ぶ
(10) 登崑崙兮食玉英 崑崙に登り玉英^{くわ}を食ひ

(11) 與天地兮同壽

天地と壽よはひを同ひとしくし

(12) 與日月兮同光

日月と光を同しくせん

(13) 哀南夷之莫吾知兮

南夷の吾を知る莫からんことを哀しみ

(14) 旦余濟乎江湖

あした旦に余 江湖わたを濟らんとす

〔通釋〕

わたくしは幼少の頃からこの非凡にして立派な服裝を好んだ。すでに年老いた今もその氣持は衰えてはいない。きらめく長劍を帶び、高くそびえる切雲冠をかぶっている。わたくしは明月珠をあしらった飾りを羽織り、宝玉をおびものとしてゐる。それなのに、世の中は乱れ濁り、わたくしの高潔な行いを知る者はいない。わたくしはいま、空高く馳せてもう顧みるまい。青い竜を車につけ、白いみずちをそえうまにして、わたくしは帝舜とともに玉の園に遊ぶ。崑崙の山に登り玉の花を口にし、わたくしは天地と寿命の長さを等しくし、日月の光と同じように輝きたい。南方の蛮族は自分のことを知ってはくれまい、と哀しみながら、朝早く長江や湘江を渡っていこうとする。

〔洪興祖補注〕

(1) 〈余幼好此奇服兮〉

奇、異也。或曰、奇服、好服也。

〔訓讀文〕

奇は、異なるなり。或は曰く、奇服は、好服なり、と。

〔語釋〕

○奇服——王注「好服」や本譯注（2）「奇偉之服」からして、補注では「非凡なほど立派で素晴らしい服」の意か。○或曰——王逸以前に「奇服」を「好服」とする説は、管見の限り見当たらない。『楚辭章句疏證』（上海古籍出版社）にも、類似する用例は挙がるものの、「好服」とする注は認められない。○好服——ここでは、「見目好い服」の意。

（2）〈年既老而不衰〉

衰、懈也。言己少好奇偉之服、履忠直之行、至老不懈。五臣云、衰、退也。雖年老而此心不退。

〔訓讀文〕

衰は、おとした懈るなり。言ふところは、己少くして奇偉の服を好み、忠直の行を履み、老ゆるに至るも懈らず。五臣云ふ、衰は、退なり。年老ゆと雖も、而れども此の心は退かず、と。

〔語釋〕

○不衰——補注所引五臣注に拠れば、「衰」は「退」と同意。共に、減退すること。○奇偉之服——奇拔で立派な服。○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」の撮要。「銑曰く、衰は、退なり。原少くして奇服異行を好む。年老ゆと雖も、而れども此の心退かずと言ふ（銑曰、衰、退也。原言少好奇服異行。雖年老、而此心不

退」とある。

〔3〕〈帶長鋏之陸離兮〉

長鋏、劍名也。其所握長劍。楚人名曰長鋏也。五臣云、陸離、劍低昂貌。

〔補曰〕鋏、古挾切。莊子曰、韓魏爲鋏。注云、鋏、把也。史記曰、彈劍而歌曰、長鋏歸來乎。文選注云、鋏、刀身劍鋒也。有長鋏・短鋏。

〔訓讀文〕

長鋏は、劍の名なり。其の握る所の長劍なり。楚人名づけて長鋏と曰ふなり。五臣云ふ、陸離は、劍の低昂の貌、と。

〔補に曰く〕鋏、古挾の切。莊子に曰く、韓・魏は鋏と爲す、と。注に云ふ、鋏は、把なり。史記に曰く、劍を弾じて歌ひて曰く、長鋏よ歸來らんか、と。文選注に云ふ、鋏、刀身劍鋒なり。長鋏・短鋏有り、と。

〔語釋〕

○長鋏——刀劍の一種。柄が長い刀劍のこと。○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○陸離——ここでは、刀の柄がきらきらと輝くこと。○低昂——ここでは、腰に釣り提げた劍が上下して揺れる様子。裝飾がきらめくさまを言う。○莊子曰——『莊子集解』（新編諸子集成）卷八「說劍第三十」は「鋏」を「夾」に作る。○注云——『莊子集解』（新編諸子集成）卷八「說劍第三十」所引司馬彪注に「夾、古協の反、把なり。一本鋏に作る（夾、古協反、把也。一本作鋏）」とある。○史記曰——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷七十五「孟嘗君列傳第十五」に同文あり。なお「彈劍而歌」とは、刀を鳴らして歌うこと。○文選注——『文選』（奎章閣本 日本東京大學東洋文化研究所藏朝鮮活字本六臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○刀身劍鋒——刀の切っ先が鋭い。

〔4〕〔冠切雲之崔嵬〕

崔嵬、高貌也。言己内修忠信之志、外帶長利之劍、戴崔嵬之冠。其高切青雲也。嵬、一作巍。五臣云、切雲、冠名。

〔補曰〕崔、音摧。嵬・巍、並五回切。

〔訓讀文〕

崔嵬は、高き貌なり。言ふところは、己内に忠信の志を修め、外に長利の劍を帶び、崔嵬の冠を戴く。其の高きこと青雲を切るなり。嵬、一に巍に作る。五臣云ふ、切雲は、冠の名。

〔補に曰く〕崔、音は摧。嵬・巍、並びに五回の切。

〔語釋〕

○切雲之崔嵬——雲を切り裂くほど高く鋭い冠。切雲は、冠の名。○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。

〔5〕〔被明月兮珮寶璐〕

在背曰被。寶璐、美玉也。言己背被明月之珠、要佩美玉、德寶兼備、行度清白也。珮、一作佩。五臣云、被、猶服也。明月、珠名。

〔補曰〕淮南曰、明月之珠、不能無類。注云、夜光之珠、有似月光。故曰明月。璐、音路。說文云、玉名。

〔訓讀文〕

背に在るを被と曰ふ。寶璐は、美玉なり。言ふところは、己背に明月の珠を被て、要に美玉を佩び、德寶兼備し、行度清白なり。珮、一に佩に作る。五臣云ふ、被は、猶ほ服するがときなり。明月は、珠の名。

〔補に曰く〕淮南に曰く、明月の珠、類無きこと能はず、と。注に云ふ、夜光の珠、月光に似たる有り。故に明月と曰ふ。璐、音は路。説文に云ふ、玉の名、と。

〔語釋〕

○被明月——明月の如き宝玉を縫い付けた羽織りものを羽織る。○寶璐——美玉。「璐」は、玉の名。○要——ここでは、腰。○德寶兼備、行度清白也——完成された人格とそれに相応な美玉を兼ね備え、振舞いが清廉潔白である。○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○淮南曰——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷十三「汜論訓」に同文あり。○注云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷十三「汜論訓」に同文あり。○説文云——『説文解字注』（經韻樓原刻本）二篇上「玉」に「璐、玉なり（璐、玉也）」とある。

（6）〈世溷濁而莫余知兮〉

溷、亂也。濁、貪也。一無兮字。

〔訓讀文〕

溷は、亂るるなり。濁は、貪なり。一に兮の字無し。

〔語釋〕

○溷濁——王逸注「濁、貪也」から、ここでは、私欲に走る者どもによつて世が甚だしく混亂するさま。

〔7〕〈吾方高馳而不顧〉

言時世貪亂、遭君蔽闇、無有知我之賢。然猶高行抗志、終不回曲也。一本句末有兮字。五臣云、言我冠帶佩服、莫不盛美、加之忠信貞潔、而遭世溷濁、無相知者。顧世上如此。故高馳不顧、願駕虬螭而遠去也。

〔訓讀文〕

言ふところは、時世貪亂し、君の蔽闇たるに遭ひ、我の賢を知る有る無し。然れども猶ほ行を高くし志を抗し、終に回曲せざるなり。一本句末に兮の字有り。五臣云ふ、言ふところは、我が冠帶佩服は、盛美ならざる莫く、之に忠信貞潔を加ふるも、而れども世の溷濁に遭ひて、相知る者無し。世上を顧みること此の如し。故に高く馳せて顧みず、と。虬螭に駕して遠く去らんことを願ふなり。

〔語釋〕

○貪亂——私利私欲を求めて秩序が保たれていないさま。○遭君蔽闇——邪佞の臣下に耳目を奪われ、蒙昧になつてしまつた君主が治める世に、意に反して居合わせること。○高行抗志——振舞いを高潔にし、志を真つ直ぐにして拠り所とする。

○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。

〔8〕〈駕青虬兮驂白螭〉

虬・螭、神獸。宜於駕乘。以喻賢人清白、宜可信任也。五臣云、虬・螭、皆龍類。

〔補曰〕虬、見騷經。螭、見九歌。

〔訓讀文〕

虬・螭は、神獸なり。宜しく駕乗すべし。以て賢人清白にして、宜しく信任すべきに喩ふるなり。五臣云ふ、虬・螭、皆龍の類なり、と。

〔補に曰く〕虬、騷經に見ゆ。螭、九歌に見ゆ。

〔語釋〕

○虬見騷經——虬・螭は、共に龍の一種。王注「賢人清白」によれば、賢人の喩え。「見騷經」については、『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷一「離騷章句第一」に「玉虬に馴して以て鷺に乘る（馴玉虬以乘鷺兮）」とある。○螭見九歌——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷二「九歌章句第二」「河伯」に「兩龍に駕して螭を驂にす（駕兩龍兮驂螭）」とある。

〔9〕〈吾與重華遊兮瑤之圃〉

重華、舜名。瑤、玉也。圃、園也。言已想侍虞舜、遊玉園。猶言遇聖帝升清朝也。遊、一作游。一云、瑤、石次玉也。

〔補曰〕山海經云、槐江之山、上多琅玕金玉、實惟帝之平圃。

〔訓讀文〕

重華は、舜の名。瑤は、玉なり。圃は、園なり。言ふところは、己虞舜に侍して、玉園に遊ばんことを想ふ。猶ほ聖帝に遇ひて清朝に升ると言ふがごときなり。遊、一に游に作る。一に云ふ、瑤は、石なるも玉に次ぐなり、と。

〔補に曰く〕 山海經に云ふ、槐江の山、上に琅玕金玉多く、實に惟れ帝の平圃なり、と。

〔語釋〕

○重華——舜の名。『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷一「離騷章句第一」の「就重華而陳詞」洪興祖注に「先儒は重華を以て舜の名と爲す（先儒以重華爲舜名）」とある。詳しくは、譯注稿（五）（『國學院大學中國學會報』第三十八輯所収）を参照されたい。

○山海經云——『山海經校注』（上海古籍出版社）卷二「西山經」の撮要。「又た西三百二十里に曰ふ、槐江の山、丘時の水出づるなり。而して北流、洊水に注ぎ、其の中嬴母多し。其の上青雄黃多く、多く琅玕黄金の玉を藏す。其の陽には丹粟多く、其の陰には多く黄金銀實を采る。惟れ帝の平圃なり（又西三百二十里曰、槐江之山、丘時之水出焉。而北流注于洊水、其中多嬴母。其上多青雄黃、多藏琅玕黄金玉。其陽多丹粟、其陰多采黄金銀實。惟帝之平圃）」とある。○平圃——美玉が産出される、天子の田園。○瑤、石次玉也——瑤は、玉に次ぐほどに優れた玉である。

（10）（11）〈登崑崙兮食玉英 與天地兮同壽〉

猶言坐明堂、受爵位。崑崙、一作崑崙。食、一作飡。五臣云、瑤圃・玉英、皆美言之。

〔補曰〕 爾雅、西北之美者、有崑崙虛之瑤琳琅玕焉。援神契曰、玉英、玉有英華之色。

〔訓讀文〕

猶ほ明堂に坐して、爵位を受くと言ふがごとし。崑崙は、一に崑崙に作る。食は、一に飡さんに作る。五臣云ふ、瑤圃・玉英、皆之を美言す、と。

〔補に曰く〕 爾雅に、西北の美なる者、崑崙虚の瑤琳琅玕有り、と。援神契に曰く、玉英、玉に英華の色有り、と。

〔語釋〕

○明堂——天子が坐する堂。褒賞を授けるための場としても利用される。ここでは、屈原が重華（舜）に見えて、正統な評価を得るための場。○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○爾雅——『爾雅正義』（十三經注疏）卷六「釋地第九」に同文あり。○璆琳琅玕——すべて美玉の名。○援神契曰——『孝經援神契』のこと。『孝經』の緯書の一種。現在は『七緯』等に収められる。佚書であり、現行の『七緯』等に収録される文は本書にあるような引用から収集されたものである。

〔12〕〈與日月兮同光〉

言己年與天地相敵、名與日月同耀。一云、同壽齊光。一云、比壽齊光。五臣云、言若得値於此時、而我年德冀如是也。

〔補曰〕 莊子曰、吾與日月參光、吾與天地爲常。

〔訓讀文〕

言ふところは、己の年は天地と相敵（敵）し、名は日月と同一に耀く。一に云ふ、同壽齊光、と。一に云ふ、比壽齊光、と。五臣云ふ、言ふところは、若し此の時に値ふを得ば、我が年徳の冀ふことは是の如し、と。

〔補に曰く〕 莊子に曰く、吾日月と光を參へ、吾天地と常爲り、と。

〔語釋〕

○年與天地相敵、名與日月同耀——天地の運行と自身の寿命をとものにし、日月と同様に自身の名を輝かせたい。従って、自身の寿命と名譽を永遠のものにしたい。従って、常に自らの側に正統性が備わるさまをいう。なお「敵」については、字の通り解せば意味が通らない。「惜誦」に「又た敵はれて之を白する莫し（又敵而莫之白）」とあり、「敵」と同様の用法と解

した。

○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○莊子曰——『莊子集解』（新編諸子集成）卷四「外篇騷拇第八」に同文あり。

〔13〕〈哀南夷之莫吾知兮〉

屈原怨毒楚俗嫉害忠貞、乃曰哀哉南夷之人、無知我賢也。

〔補曰〕國語云、楚爲荆蠻。

〔訓讀文〕

屈原 楚俗の忠貞を嫉害するを怨毒して、乃ち曰く、哀しいかな南夷の人、我が賢を知る無きなりと。

〔補に曰く〕國語に云ふ、楚を荆蠻と爲す、と。

〔語釋〕

○怨毒楚俗——楚の風潮として、屈原を妬むが故に阻害してくることを怨み惡む。○國語云——『國語正義』（中文出版社）卷十四「晉語八」に同文あり。

〔14〕〈且余濟乎江湖〉

旦、明也。濟、渡也。言已放棄、以明旦之時始去、遂渡江湖之水。言明旦者、紀時明、刺君不明也。乎、一作於。

〔訓讀文〕

旦は、明くるなり。濟は、渡るなり。言ふところは、己放棄せられ、明旦の時を以て始めて去り、遂に江・湘の水を渡る。言ふところは、明旦とは、時明を紀し、君の不明を刺るなり。乎、一に於に作る。

〔語釋〕

○明旦——明朝。○江湘——長江と湘水。○紀時明——時期を正しくして。

〔本文〕

- (15) 乗鄂渚而反顧兮 鄂渚に乗りて反顧すれば、
(16) 欸秋冬之緒風。 欸、秋冬の緒風。
(17) 步余馬兮山臯 余が馬を山臯に歩ませ、
(18) 邸余車兮方林 余が車を方林に邸れしむ。
(19) 乘船船余上沅兮 船船に乗りて余れ沅に上る。
(20) 齊吳榜以擊汰 吳榜を齊しくして以て汰を撃つ。
(21) 船容與而不進兮 船容與して進まず、
(22) 淹回水而疑滯 回水に淹まりて疑滯す。
(23) 朝發枉渚兮 朝に枉渚を發し、
(24) 夕宿辰陽 夕に辰陽に宿す。
(25) 苟余心其端直兮 苟に余が心の端直ならば、

(26) 雖僻遠之何傷

へきえん
僻遠と雖も之れ何ぞ傷まん。

〔通釋〕

鄂渚に登って顧みれば、ああ秋風の名残り風が吹く。わが馬を山澤に歩ませ、わが車を方林にまで進める。窓つきの船に乗りわたくしは沅江を遡った。舟の櫂をそろえて水波を撃つ。しかし船はのろろとして進まず、渦巻く水にとどめられて滞る。朝方に枉渚を船発して、夕方に辰陽に宿泊する。かりにもしわたくしの心が正直であるならば、僻遠の地に置かれたとしても、どうして傷み悲しむことがあるうか。

〔洪興祖補注〕

(15) 〈乗鄂渚而反顧兮〉

乗、登也。鄂渚、地名。

〔補曰〕 楚子熊渠、封中子紅於鄂。鄂州、武昌縣地是也。隋以鄂渚爲名。

〔訓讀文〕

乗は、登るなり。鄂渚は、地名なり。

〔補に曰く〕 楚子熊渠は中子紅を鄂に封ず。鄂州、武昌縣の地は是れなり。隋は鄂渚を以て名と爲す。

〔語釋〕

○鄂渚——湖北省武昌縣の西の長江の中。○楚子熊渠——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷四十「楚世家」に「熊繹は熊艾を生み、熊艾は熊亶を生み、熊亶は熊勝を生む。熊勝は弟の熊楊を以て後と爲す。熊楊は熊渠を生む（熊繹生熊艾、熊艾生熊亶、熊亶生熊勝。熊勝以弟熊楊爲後。熊楊生熊渠）」とある。○中子紅——中子は第二番目の子。ここでは熊渠の次子である紅が鄂に封ぜられたという意。なお『史記』（點校本二十四史修訂本）卷四十「楚世家」に「熊渠曰く、『我は蠻夷なり、中國の號諡に與らず』と。乃ち其の長子康を立てて句亶王と爲し、中子紅を鄂王と爲す（熊渠曰、我蠻夷也、不與中國之號諡。乃立其長子康爲句亶王、中子紅爲鄂王）」とある。

〔16〕（欽秋冬之緒風）

欽、歎也。緒、餘也。言已登鄂渚高岸、還望楚國、嚮秋冬北風、愁而長歎、心中憂思也。五臣云、秋冬之風、搖落萬物、比之讒佞、是以歎焉。

〔補曰〕欽、音哀。方言云、欽、然也。南楚凡言然者、曰欽。

〔訓讀文〕

欽は、歎^{なげ}くなり。緒は、餘りなり。言ふところは、己れ鄂渚^{がくしほ}の高岸に登り、還つて楚國を望み、秋冬の北風に嚮^{むか}ひて、愁へて長歎し、心中憂思するなり。五臣云ふ、秋冬の風、萬物を搖落す、之を讒佞に比す、是を以て焉を歎ず、と。

〔補に曰く〕欽、音は哀。方言に云ふ、欽は、然なり。南楚凡そ然と言ふ者、欽と曰ふ、と。

〔語釋〕

○五臣云——『五臣注文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○讒佞——心が邪惡で口

先がうまいこと。又其の人のこと。ここでは楚の懷王をとりまく佞臣のこと。○方言云——『揚雄方言校釋匯證』（中華書局）卷十に同文あり。

〔17〕（18）〈歩余馬兮山阜 邸余車兮方林〉

邸、舍也。方林、地名。言我馬強壯、行於山阜、無所驅馳。我車堅牢、舍於方林、無所載任也。以言己才德方壯、誠可任用、弃在山野、亦無所施也。邸、一作低。

〔補曰〕邸、禮典切。低無舍義。風賦云、邸蓼葉而振氣。注云、邸、觸也。

〔訓讀文〕

邸は、舍とどまるなり。方林は、地名なり。言ふところは、我が馬強壯きやうそうにして、山阜さんかうに行くも、驅馳くちする所無し。我が車堅牢けんらうにして、方林に舍とどまるも、載任する所無きなり。以て己の才德方まさに壯さかんにして、誠に任用すべきも、弃すてられて山野に在りて、亦た施す所無きを言ふなり。邸は一に低に作る。

〔補に曰く〕邸は、禮典の切。低に舍の義無し。風賦に云ふ、蓼葉れうように邸ふれて氣を振ふ、と。注に云ふ、邸は、觸るるなり、と。

〔語釋〕

○邸——王注には「邸は、舍まるなり」とあるが、補注には「邸は、觸るるなり」とあり、本訳注稿は補注の訓詁に従う。
○山阜——山と澤。○驅馳——馬を駆け走らすこと。○載任——物に乗せて擔ぐこと。○低無舍義——『楚辭章句疏證』（上海古籍出版社）に「或いは捨に作り、舍棄の義は、非なり（或作捨、舍棄之義、非也）」とある。○風賦云宋玉——『文選』（奎章閣本 日本東京大學東洋文化研究所藏朝鮮活字本六臣注）卷十三 賦庚 物色「風賦」に同文あり。

(19) 〈乘舸船余上沅兮〉

舸船、船有牕牖者。

〔補曰〕舸、音靈。淮南云、越舸蜀艇。注云、舸、小船也。釋文作舸。

〔補曰〕上、謂溯流而上也。上、上聲。

〔訓讀文〕

舸船は、船に牕牖有る者なり。

〔補に曰く〕舸、音は靈。淮南に云ふ、越舸蜀艇と。注に云ふ、舸は、小船なり、と。釋文は舸に作る。

〔補に曰く〕上は、流れに溯^{むか}ひて上るを謂ふなり。上は、上聲なり。

〔語釋〕

○牕牖——まど。○淮南云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷二「俶真訓」に同文あり。○注云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷二「俶真訓」高誘の注に同文あり。

○釋文——『楚辭釋文』のこと。今は散逸して伝わらない。

(20) 〈齊吳榜以擊汰〉

吳榜、船權也。汰、水波也。言已始去、乘牕舸之船、西上沅・湘之水、士卒齊舉大權而擊水波、自傷去朝堂之上、而入湖澤之中也。或曰、齊悲歌、言愁思也。

〔補曰〕字書、舸、船也。吳、疑借用。榜、北孟切、又音謗、進船也。汰、音泰。

〔訓讀文〕

吳榜は、船の櫂かなり。汰は、水波なり。言ふところは、己れ始めて去りしとき、臆おそ船の船に乗り、西して沅・湘の水を上り、士卒齊しく大櫂を擧げて水波を撃ち、自ら朝堂の上より去りて、湖澤の中に入るを傷むなり。或は曰く、齊しく悲歌すとは、愁思を言ふなり。

〔補に曰く〕字書に、𦨇は、船なりと。吳は、疑ふらくは借用ならん。榜は、北孟の切、又の音は謗、船を進むるなり。汰、音は泰。

〔語釋〕

○臆船之船——まどつきの船。○沅湘——沅水と湘水。○去朝堂之上——朝廷から去ること。ここでは楚から去ること。○字書——『宋本広韻』（藝文院書館）卷一に「𦨇、船の名（𦨇、船名）」とある。

〔21〕〔22〕〈船容與而不進兮 淹回水而疑滯〉

疑、惑也。滯、留也。言士衆雖同力引櫂、船猶不進、隨水回流、使己疑惑有還意也。疑、一作凝。五臣云、容與、徐動貌。淹、留也。疑滯者、戀楚國也。

〔補曰〕江淹賦云、舟凝滯於水濱。杜子美詩云、舊客舟凝滯。皆用此語。其作凝者、傳寫之誤耳。

〔訓讀文〕

疑は、惑ふなり。滯は、留まるなり。言ふところは、士衆力を同あわせて櫂を引くと雖ども、船猶ほ進まず、水に随したがひて回流し、己れをして疑惑して、還意有らしむるなり。疑、一に凝に作る。五臣云ふ、容與は、徐動の貌。淹は、留まるなり。疑滯す

る者は、楚國を戀^こふるればなり、と。

〔補に曰く〕江淹の賦に云ふ、舟は水濱に凝滯す、と。杜子美の詩に云ふ、舊客の船凝滯す、と。皆此の語を用ふ。其の凝に作るは、傳寫の誤りなるのみ。

〔語釋〕

○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。○江淹賦云——『江文通集』（上海古籍出版社）卷一「別賦」に同文あり。○杜子美詩云——『杜詩詳注』（中華書局）卷十六「贈秘書監」に同文あり。

〔23〕〔朝發枉渚兮〕

枉渚、地名。渚、一作渚。

〔訓讀文〕

枉渚は、地名なり。渚は、一に渚に作る。

〔語釋〕

○枉渚——ここでは地名とあるが、次節の補注に「沅水又東して、小灣を歷、之を枉渚と謂ふ（沅水又東、歷小灣、謂之枉渚）」とある。

〔24〕〔夕宿辰陽〕

辰陽、亦地名也。言己乃從枉渚、宿辰陽、自傷去國、日已遠也。或曰、枉、曲也。渚、沚也。辰、時也。陽、明也。言己將

去枉曲之俗。而趨時明之鄉也。

〔補曰〕前漢、武陵郡有辰陽。注云、三山谷辰水所出、南入沅七百五十里。水經云、沅水東逕辰陽縣東南、合辰水。舊治在辰水之陽、故取名焉。楚詞所謂夕宿辰陽也。沅水又東、歷小灣、謂之枉渚。

〔訓讀文〕

辰陽は、亦た地名なり。言ふところは、己乃ち枉渚わうしよ從り、辰陽に宿り、自ら國を去りて日に己に遠ざかるを痛むなり。或いは曰く、枉は、曲がるなり。渚は、汙なり。辰は、時なり。陽は、明なり。言ふところは、己れ將に枉曲わうきよくの俗を去らんとす。而して時明の郷に趨おもむくなり。

〔補に曰く〕前漢武陵郡に辰陽有り。注に云ふ、三山の谷辰水の出づる所、南して沅に入ること七百五十里、と。『水經』に云ふ、沅水東して辰陽の東南を逕て、辰水に合す。舊治辰水の陽に在り、故に名を取る。『楚詞』に所謂る夕に辰陽に宿るなり、と。沅水又東して、小灣しょうわんを歷、之を枉渚と謂ふ、と。

〔語釋〕

○辰陽——縣名。漢置く。戰國の楚の地。王注所引「或曰」によれば、朝に去った枉渚を枉曲、夕に宿った辰陽を時明と訓じ、枉曲の俗を去り時明の郷に趨くと解釈する。○枉曲——法を曲げて罰すること。○時明——明らかに治る世のこと。○前漢武陵郡有辰陽——『漢書』（點校本二十四史修訂本）卷二十八「地理志第八」に同文あり。○注云——『漢書』（點校本二十四史修訂本）卷二十八「地理志第八」の顔師古注に同文あり。○水經云——『水經校注』卷三十七「沅水」の撮要。「沅水東して辰陽縣の東南を逕て、辰水に合す。舊治辰水の陽きたに在り、故に名を取る。楚詞に曰く、夕に辰陽に宿すなり、と。……沅水又東して、小灣しょうわんを歷、之を枉渚と謂ふ（沅水東逕辰陽縣東南、合辰水。舊治在辰水之陽、故取名焉。楚詞曰、夕宿辰陽也。……沅水又東、歷小灣、謂之枉渚）」とある。

(25) 〈苟余心其端直兮〉

苟、誠也。其、一作之。五臣云、苟、且也。

〔訓讀文〕

苟は、誠なり。其は、一に之に作る。五臣云ふ、苟は、且なり、と。

〔語釋〕

○五臣云——『五臣注文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）卷三十三騷下「涉江」に同文あり。

(26) 〈雖僻遠之何傷〉

僻、左也。言我惟行正直之心、雖在遠僻之域、猶有善稱、無害疾也。故論語曰子欲居九夷也。僻、一作辟。五臣云、原自解之詞。

〔訓讀文〕

僻は、左なり。言ふところは、我れ惟だ正直の心を行ふのみにして、遠僻えんへきの域に在りと雖ども、猶ほ善稱有りて、害疾無きなり。故に『論語』に子九夷に居らんと欲するなりと曰ふ。僻は、一に辟に作る。五臣云ふ、原の自ら解ゆるすの詞なり、と。

〔語釋〕

○遠僻——人里遠い片田舎のこと。○猶有善稱、無害疾也——片田舎の地に行こうと名声を有し、そこない非難されること

はない。○論語曰——『論語注疏』（十三經注疏）子罕第九に「子九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、『陋なり、之を如何せん』と。子曰く、『君子之に居らば、何の陋か之れ有らん』と（子欲居九夷。或曰、陋、如之何。子曰、君子居之、何陋之有）とある。○五臣云——『五臣注文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）卷三十三騷下「涉江」に同文あり。

〔本文〕

- (27) 入激浦余儻個兮
激浦じよほに入りて余 儻個せんぐわいし、
迷ひて吾の如く所を知らず。
(28) 迷不知吾所如
深林えう杳えうとして以て冥冥めいめいたり、
(29) 深林杳以冥冥兮
猿狖えんいうの居る所なり。
(30) 猿狖之所居
山は峻高にして以て日を蔽ひ、
(31) 山峻高以蔽日兮
下は幽晦いうゐにして以て雨多し。
(32) 下幽晦以多雨
霰雪さんせつ紛ふとして其れ垠かきり無く、
(33) 霰雪紛其無垠兮
雲霏ひとして宇のきに承く。
(34) 雲霏霏而承宇
吾が生の樂しみ無きを哀かなしみ、
(35) 哀吾生之無樂兮
幽獨いうどくにして山中に處る。
(36) 幽獨處乎山中
吾は心を變じて俗に従ふ能はず、
(37) 吾不能變心而從俗兮
固つひ將愁苦して終に窮まらんとす。
(38) 固將愁苦而終窮

〔通釋〕

激浦にはいつてわたくしはさまよい歩くうち、迷つてわたくしの行くべきところも分らなくなった。深林は奥深く暗く、なんとそこは猿のすみかであつた。山は險しく高くそびえて日を蔽い、その下は暗く雨が多い。あたり一面、はてしもなく霰や雪が乱れ降り、押し寄せるように雲が軒先を流れて行く。おのれの楽しみもない生活を悲しみつつ、わたくしは独り山中に身を置いている。しかし、わたくしは心を変じて世俗に従うことはできない。もとよりわが身は愁い苦しみ、終には窮死するに至るであらう。

〔洪興祖補注〕

〔27〕〈入激浦余儻個兮〉

激浦、水名。儻個、一作遄迴。五臣云、激、亦浦類。遄、轉。迴、旋也。

〔補曰〕激、徐呂切。

〔訓讀文〕

激浦は、水名なり。儻個は、一に遄迴に作る。五臣云ふ、激も、亦た浦の類なり。遄は、轉^{めぐ}るなり。迴は、旋^{めぐ}るなり、と。
〔補に曰く〕激は、徐呂の切。

〔語釋〕

○五臣云——『文選』（奎章閣本 日本東京大學東洋文化研究所藏朝鮮活字本六臣注）卷三十三騷下 屈平「涉江」に同文あり。

〔28〕〈迷不知吾所如〉

迷、惑也。如、之也。言已思念楚國、雖循江水涯、意猶迷惑、不知所之也。一本吾下有之字。

〔訓讀文〕

迷は、惑ふなり。如は、之^ゆくなり。言ふところは、己楚國を思念し、江水の涯^{みぎわ}に循^{したが}ふと雖も、意猶ほ迷惑して、之く所を知らざるなり。一本、吾の下に之の字有り。

〔語釋〕

○循江水涯——長江沿いの川岸を進んでいくこと。○意猶迷惑、不知所之也——どうしたらよいか分からなくなり、当て所なく彷徨うこと。

〔29〕〈深林杳以冥冥兮〉

山林草木茂盛。一云、杳杳以冥冥。杳、一作晦。冥冥、一作冥寞。五臣云、冥冥、暗貌。

〔訓讀文〕

山林草木茂盛なり。一に云ふ、杳杳以冥冥、と。杳は、一に晦に作る。冥冥は、一に冥寞に作る。五臣云ふ、冥冥は、暗き貌なり、と。

〔語釋〕

○五臣云——『文選』（奎章閣本 日本東京大學東洋文化研究所藏朝鮮活字本六臣注）卷第二十一 詩乙 詠史 曹子建「三良詩一首」に「涕を攪ぬひて君の墓に登り、穴に臨みて天を仰ぎて歎ず。長夜何ぞ冥冥、一たび往きて復たと還らず（攪涕登君墓、臨穴仰天歎。長夜何冥冥、一往不復還）」とある。また、五臣注に「翰曰く、『墓中は明らかならず。是れ長夜冥冥にして暗き貌を謂ふなり』と（翰曰、墓中不明。是謂長夜冥冥暗貌）」とある。

（30）〈猿狢之所居〉

非賢士之道徑。一本此句上有乃字。五臣云、猿狢、輕捷之獸。喻國之昏亂、邪巧生焉、非賢智所能處也。

〔補曰〕猿狢、見九歌。

〔訓讀文〕

賢士の道徑に非ず。一本、此の句の上に乃の字有り。五臣云ふ、猿狢は、輕捷の獸なり。國の昏亂するや、邪巧生ずるに喩ふ。賢智の能く處る所に非ざるなり、と。

〔補に曰く〕猿狢は、九歌に見ゆ。

〔語釋〕

○非賢士之道徑——賢人の通るみちではない意。○五臣云——『文選』（奎章閣本 日本東京大學東洋文化研究所藏朝鮮活字本六臣注）卷三十三 騷下 屈平「涉江」に同文あり。○見九歌——『楚辭補注』卷二 九歌章句第二「山鬼」に「羆いかづち填填として雨冥冥たり、猿啾啾として又夜鳴く（羆填填兮雨冥冥、猿啾啾兮又夜鳴）」とある。また、洪興祖注に「狢は猿に似たり（狢似猿）」とある。

〔31〕〈山峻高以蔽日兮〉

言險阻危傾也。以、一作而。

〔訓讀文〕

險阻危傾なるを言ふなり。以、一に而に作る。

〔語釋〕

○險阻危傾——「險阻」は、山の険しいこと。「危傾」は、危険な傾斜を指す。従ってここでは、急勾配な山の意。

〔32〕〈下幽晦以多雨〉

言暑濕泥濘也。

〔補曰〕此言陰氣盛而多雨也。

〔訓讀文〕

暑濕泥濘を言ふなり。

〔補に曰く〕此れ陰氣盛んにして雨多きを言ふなり。

〔語釋〕

○暑濕泥濘——蒸し暑く、湿氣が多く、土地がぬかるむ様

(33) 〈霰雪紛其無垠兮〉

涉冰凍之盛寒。

〔補曰〕詩云、如彼雨雪、先集維霰。霰、霰也。一曰、雨雪雜。垠、音銀、畔岸也。

〔訓讀文〕

冰凍の盛寒を渉る。

〔補に曰く〕詩に云ふ、彼の雪雨ふるがごとき、先づ集まるは維れ霰なり、と。霰は、霰なり。一に曰く、雨雪まち雜る、と。垠、音は銀、畔岸なり。

〔語釋〕

○詩云——『毛詩正義』(十三經注疏) 卷十四 小雅「頍弁」に同文あり。○一曰——『漢書』(點校本二十四史) 卷二十七 中之下「五行志第七中之下」の顏師古注に「霰は、雨雪 雜りて下るふ、音は先見の反なり(霰、雨雪雜下、音先見反)」とある。

(34) 〈雲霏霏而承宇〉

室屋沈没、與天連也。或曰、日以喻君、山以喻臣、霰雪以興殘賊、雲以象佞人。山峻高以蔽日者、謂臣蔽君明也。下幽晦以多雨者、羣下專擅施恩惠也。霰雪紛其無垠者、殘賊之政害仁賢也。雲霏霏而承宇者、佞人並進、滿朝廷也。

〔補曰〕霏、芳微切。詩、雨雪霏霏。

〔訓讀文〕

室屋沈没し、天と連なるなり。或いは曰く、日は以て君に喩へ、山は以て臣に喩へ、霰雪は以て殘賊に興し、雲は以て佞人に象る、と。山峻高にして以て日を蔽ふは、臣が君の明を蔽ふを謂ふなり。下は幽晦にして以て雨多きは、羣下専ら恩惠を擅施するなり。霰雪紛として其れ垠り無きは、殘賊の政仁賢を害するなり。雲霏霏として宇に承くるは、佞人並び進みて、朝廷に滿つるなり。

〔補に曰く〕霏は、芳微の切。詩に、雪雨ること霏霏たり、と。

〔語釋〕

○室屋沈没、與天連——ここでは、五里霧中の状態となり、先が見えなくなる様。○或曰——待考。○臣蔽君明——臣下が君主の賢明さを覆い隠す様。○羣下專擅施恩惠——佞人たちが君主に阿り、恩恵を独り占めする様。○殘賊之政害仁賢——他者を慘たらしく排斥する人々の執政が、仁人や賢人を害する様。○佞人並進、滿朝廷——佞人が朝廷に溢れ返る様。○詩云——『毛詩正義』（十三經注疏）卷九小雅「采薇」に同文あり。

〔35〕〈哀吾生之無樂兮〉

遭遇讒佞、失官爵也。

〔訓讀文〕

讒佞に遭遇して、官爵を失ふなり。

〔語釋〕

なし。

(36) 〈幽獨處乎山中〉

遠離親戚、而斥逐也。

〔訓讀文〕

遠く親戚に離れて、斥逐せらるるなり。

〔語釋〕

○遠離親戚——血縁者との關係を引き離されること。

(37) 〈吾不能變心而從俗兮〉

終不易志、隨枉曲也。

〔訓讀文〕

終に志を易へて、枉曲に隨はざるなり。

〔語釋〕

なし。

(38) 〈固將愁苦而終窮〉

愁思無聊、身困窮也。

〔訓讀文〕

愁思無聊むれうして、身困窮するなり。

〔語釋〕

○愁思無聊——愁えて、身のよりどころを無くすること。

〔本文〕

(39) 接輿髡首兮

接輿せふよは髡首こんしゅし

(40) 桑扈羸行

桑扈らかうは羸行るいこうす

(41) 忠不必用兮

忠必ずしも用ひられず

(42) 賢不必以

賢必ずしも以ひられず

(43) 伍子逢殃兮

伍子わさは殃はひに逢ひ

(44) 比干菹醢

比干しよかんは菹醢しよかいにせらる

(45) 與前世而皆然兮 前世を與りて皆然り

(46) 吾又何怨乎今之人 吾又何ぞ今の人を怨まん

(47) 余將董道而不豫兮 余將に道を董して豫せざらん

(48) 固將重昏而終身 固より將に重ね昏れて身を終へんとす

〔通釋〕

古の隱者接輿はみずからまげを剃り落とし、桑扈は裸体で歩きまわつて世を避けた。忠賢の士も必ずしも用いられない。伍員は災いに逢い、比干は殺されて塩辛にされた。昔も皆そうなのであるから、わたくしは又なんで今の人を怨んだりしようか。わたくしはためらわずに道を正して行こうと思う。もとより重ねて暗い境遇に陥り光明を見ずに身を終えることであろう。

〔洪興祖補注〕

(39) (40) 〈接輿首髡兮 桑扈贏行〉

接輿、楚狂接輿也。髡、剔也。首、頭也、自刑身體、避世不仕也。桑扈、隱士也。去衣裸裎、效夷狄也。言屈原自傷不容於世、引此隱者以自慰也。贏、一作裸。

〔補曰〕論語曰、楚狂接輿、歌而過孔子。揚子曰、狂接輿之被其髮也。莊子曰、嗟來桑戶乎。髡、音坤、去髮也。贏、力果切、赤體也。

〔訓讀文〕

接輿は、楚の狂接輿なり。髡は、剔なり。首は、頭なり、自ら身體を刑し、世を避けて仕へざるなり。桑扈は、隱士なり。衣を去り、裸裎し、夷狄に效ふなり。言ふところは屈原自ら世に容れられざるを傷み、此の隱者を引きて以て自慰するなり。羸は、一に裸に作る。

〔補に曰く〕論語に曰く、楚の狂接輿、歌ひて孔子を過ぐ、と。揚子に曰く、狂の接輿の其の髪を被するなり、と。莊子に曰く、嗟來桑戶よ、と。髡、音は坤、髪を去るなり。羸は、力果の切、赤體なり、と。

〔語釋〕

○接輿——春秋楚の隱者。○羸行——衣冠束帶をつけず、赤裸で行くこと。○夷狄——未開の國。東方に夷、北方に狄という。○論語曰——『論語注疏』（十三經注疏）卷九「微子第十八」に同文あり。○揚子曰——『揚子雲集』（欽定四庫全書本）卷一「淵騫篇」に同文あり。○莊子曰——『莊子集解』（新編諸子集成）卷三「大宗師第六」に同文あり。

〔41〕〔42〕〔忠不必用兮 賢不必以〕

以、亦用也。

〔補曰〕語曰、不使大臣怨乎不以。左氏曰、師能左右之曰以。

〔訓讀文〕

以も、亦た用ふるなり。

〔補に曰く〕語に曰く、大臣をして以ひざるを怨みしめず、と。左氏に曰く、師能く之を左右するを以と曰ふ、と。

〔語釋〕

○語曰——『論語注疏』（十三經注疏）卷九「微子第十八」に同文あり。○師能左右之曰以——軍隊を自由に率いられることを「以」という。○左氏曰——『春秋左傳正義』（十三經注疏）卷十五「僖公二十六年」に同文あり。

〔43〕（伍子逢殃兮）

伍子、伍子胥也。爲吳王夫差臣、諫令伐越、夫差不聽、遂賜劍而自殺。後越竟滅吳、故言逢殃。

〔補曰〕子胥、伍員也。史記、越王句踐率其衆以朝吳、吳王喜。惟子胥懼曰、是棄吳也。諫不聽、賜子胥屬鏤之劍以死。將死、曰、抉吾眼、置吳東門之上、以觀越之滅吳也。莊子曰、伍員流于江。鄒陽曰、子胥鴟夷。

〔訓讀文〕

伍子は、伍子胥なり。吳王夫差の臣と爲り、諫めて越を伐たしめんとするも、夫差聽かず、遂に劍を賜ひて自殺せしむ。後、越は竟に吳を滅ぼす。故に殃に逢ふと言ふ。

〔補に曰く〕子胥は、伍員なり。史記に、越王句踐、其の衆を率ゐて以て吳に朝す。吳王喜ぶ。惟だ子胥のみ懼れて曰く、是れ吳を棄つるなり、と。諫むるも聽かず、子胥に屬鏤しよくるの劍を賜ひて以て死せしむ。將に死せんとして、曰く、吾が眼を抉りて、吳の東門の上に置き、以て越の吳を滅ぼすを觀ん、と。莊子に曰く、伍員江に流さる。鄒陽曰く、子胥は鴟夷しゐいせらるるなり、と。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷三十一「吳太伯世家第一」に同文あり。○抉吾眼——自らの眼をえぐり出すこと。○莊子曰——『莊子集解』（新編諸子集成）卷九「外物第二十六」に同文あり。○鄒陽曰——『史記』（點校本

二十四史修訂本）卷八十三「魯仲連鄒陽列傳第二十三」に同文あり。○子胥鴟夷——子胥の遺体を馬の革で作った囊に入れることを指す。

〔44〕〈比干菹醢〉

比干、紂之諸父也。紂惑妲己、作糟丘酒池、長夜之飲、斷斷朝涉、剝剔孕婦。比干正諫、紂怒曰、吾聞聖人心有七孔。於是乃殺比干、剖其心而觀之、故言菹醢也。一云、比干、紂之庶兄。菹、一作菹。

〔訓讀文〕

比干は、紂の諸父なり。紂は妲己に惑ひて、糟丘酒池、長夜の飲を作し、斷斷朝涉して、孕婦を剝剔す。比干正諫す、紂怒りて曰く、吾聞く、聖人の心に七孔有り、と。是に於て乃ち比干を殺し、其の心を剖きて之を觀る。故に菹醢にすと言ふなり。一に云ふ、比干は、紂の庶兄なり、と。菹は、一に菹に作る。

〔語釋〕

○菹醢——古の酷烈な刑。人を殺して骨や肉を塩づけにする刑罰をいう。○諸父——父の兄弟のこと。○長夜之飲——何日も続けて酒宴を張ること。○斷斷朝涉——朝に川を渡る人のあしを切る。○剝剔孕婦——妊婦の腹を切る。○一云——待考。

〔45〕〈與前世而皆然兮〉

謂行忠直、而遇患害、如比干・子胥者多也。

〔訓讀文〕

忠直を行ひて、患害に遇ふこと。比干・子胥の如き者多きを謂ふなり。

〔語釋〕

なし。

〔46〕〈吾又何怨乎今之人〉

自古有迷亂之君、若紂・夫差、不用忠信、滅國亡身、當何爲復怨今之君乎。五臣云、此自抑之詞。

〔訓讀文〕

古自り迷亂の君有り。紂・夫差の若きは、忠信を用ひず、國を滅ぼし身を亡ぼす。當に何ぞ復た今の君を怨むと爲すべきか。五臣云ふ、此れ自抑の詞なり、と。

〔語釋〕

○迷亂——迷い乱れる。ここでは佞臣に取り卷かれ、忠臣を信用しない意。○五臣云——『文選』（日本足利學校藏宋刊明州本五臣注）卷三十三 騷下「涉江」に同文あり。

〔47〕〈余將董道而不豫兮〉

董、正也。豫、猶豫也。言己雖見先賢執忠被害、猶正身直行、不猶豫而狐疑也。

〔訓讀文〕

董は、正すなり。豫は、猶豫なり。言ふところは、己先賢の忠を執り害せらるるを見ると雖も、猶ほ身を正し行を直にして、猶豫して狐疑せざるなり。

〔語釋〕

○董道——道をただす。○執忠——忠義をとり守る。○狐疑——疑い深くて決心のつかないこと。

〔48〕〈固將重昏而終身〉

昏、亂也。言己不逢明君、思慮交錯、心將重亂、以終年命。

〔訓讀文〕

昏は、亂るるなり。言ふところは、己明君に逢はず、思慮交錯し、心將に重ね亂れて、以て年命を終へんとす。

〔語釋〕

○思慮交錯——思考が混乱する様。

〔本文〕

〔49〕亂曰

亂に曰く

(50) 鸞鳥鳳皇

鸞鳥らんちやう鳳皇ほうわう

(51) 日以遠兮

日以以て遠ざかり

(52) 燕雀烏鵲

燕雀烏鵲

(53) 巢堂壇兮

堂壇に巢くふ

(54) 露申辛夷

辛夷を露申し

(55) 死林薄兮

死りんぱく林薄かに死れ

(56) 腥臊並御

腥臊は並びに御もちゐられて

(57) 芳不得薄兮

芳薄つくを得ず

(58) 陰陽易位

陰陽は位を易へ

(59) 時不當兮

時は當らず

(60) 懷信侘傺

信を懷いて侘傺たていし

(61) 忽乎吾將行兮

忽として吾將に行さらんとす

(62) 涉江

涉江

〔通釋〕

結びの辞にいう、「鸞鳥や鳳凰は日々に遠ざかり、つばめやすずめ、からす、かささぎといった鳥が、殿堂や祭壇に巢を作っている。辛夷を重ね積みさらして、藪の内に枯死させ、悪臭を放つものが並び用いられ、芳香を発するものは近づくことができない。臣下と君主とは位を変え、よい時代に居合わせられない。忠信を懷き失意のうちにぼうつと佇んでいるうちに、ふと、わたくしは遠く去ろうと思った。」

〔洪興祖補注〕

(49) (50) (51) 〈亂曰 鸞鳥鳳皇 日以遠兮〉

鸞・鳳、俊鳥也。有聖君則來、無德則去、以興賢臣難進易退也。

〔訓讀文〕

鸞・鳳は、俊鳥なり。聖君有れば則ち來たり、德無ければ則ち去る。以て賢臣の進み難く退き易きを興するなり。

〔語釋〕

○俊鳥——すぐれた鳥。『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷一「離騷經章句第一」に「鸞は、俊鳥なり（鸞、俊鳥也）」とある。
なお、この一文は『楚辭補注』譯注稿（八）第五十小段の〔洪興祖補注〕（『國學院中國學會報』第四十一輯所収）に既出。

(52) (53) 〈燕雀烏鵲 巢堂壇兮〉

燕雀烏鵲、多口妄鳴、以喻讒佞。言楚王愚闇、不親仁賢、而近讒佞也。

〔補曰〕壇、音善、見九歌。

〔訓讀文〕

燕雀烏鵲は、多口妄鳴す。以て讒佞に喩ふ。言ふところは、楚王愚闇にして、仁賢に親しまずして、讒佞を近づくるなり。
〔補に曰く〕壇、音は善、「九歌」に見ゆ。

〔語釋〕

○多口妄鳴——口數多く無思慮に鳴き声を上げること。○愚闇——愚かで事理にくらいこと。ここでは、臣下の賢愚を区別できない様子。○見九歌——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷二「九歌章句第二」「湘夫人」「蓀壁兮紫壇」洪興祖補注に「壇、音は善（壇、音善）」とある。

〔54〕〔55〕〈露申辛夷 死林薄兮〉

露、暴也。申、重也。叢木曰林。草木交錯曰薄。言重積辛夷、露而暴之、使死於林薄之中、猶言取賢明君子、弃之山野、使之顛墜也。

〔訓讀文〕

露は、暴すなり。申は、重ぬるなり。叢木を林と曰ふ。草木交錯するを薄と曰ふ。言ふところは、辛夷を重ね積み、露はして之を暴し、林薄の中に死れしむること、猶ほ賢明なる君子を取りて、之を山野に弃て、之をして顛墜せしむるがごとくなるを言ふなり。

〔語釋〕

○辛夷——こぶし。○林薄——藪。○使之顛墜——ここでは賢明な君子を元の地位から排斥すること。

〔56〕〔57〕〈腥臊並御 芳不得薄兮〉

腥臊、臭惡也。御、用也。薄、附也。言不識味者、並甘臭惡。不知人者、信任讒佞。故忠信之士、不得附近而放逐也。

〔補曰〕臊、音騷。周禮曰、豕盲視而交睫、腥。犬赤股而躁、臊。左傳曰、薄而觀之。薄、迫也、逼近之意。如字、一音博。

下文忽翱翔之焉薄、瞭查查而薄天。並同。

〔訓讀文〕

腥臊は、臭惡なり。御は、用ふるなり。薄は、附くなり。言ふところは、味を識らざる者、並びに臭惡を甘しとす。人を知らざる者は、讒佞を信任す。故に忠信の士、附き近づくを得ずして放逐せらるるなり。

〔補に曰く〕臊、音は騒。周禮に曰く、豕の盲視にして交睫なるは、腥なり。犬の赤股にして躁なるは、臊なり、と。左傳に曰く、薄りて之を觀る、と。薄は、迫るなり。逼近するの意。字の如し。一の音は博。下文の忽ち翱翔して焉くにか薄らん、瞭查查として天に薄る。並びに同じ。

〔語釋〕

○周禮曰——『周禮注疏』（十三經注疏）卷四 天官冢宰第一「内饗」に同文あり。○豕盲視而交睫腥——いので目が見えず瞭が閉じているものを腥という。○犬赤股而躁臊——犬で股ぐらが赤く足の速いものを臊という。○左傳曰——『春秋左傳正義』（十三經注疏）卷十五「僖公二十三年」に同文あり。○逼近——近づき迫ること。○下文——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷四「九章章句第四」「哀郢」に「忽翱翔之焉薄」「瞭查查而薄天」の二句あり。

（58）（59）〔陰陽易位 時不當兮〕

陰、臣也。陽、君也。言楚王惑蔽羣佞、權臣將代君、與之易位。自傷不遇明時、而當暗世。

〔補曰〕陰陽易位、言君弱而臣強也。當、平聲。

〔訓讀文〕

陰は、臣なり。陽は、君なり。言ふところは、楚王羣佞に惑蔽し、權臣將に君に代はりて、之と位を易へんとす。自ら明時に遇はずして、暗世に當たるを傷む。

〔補に曰く〕陰陽位を易ふとは、言ふところは、君弱くして臣強きなり。當は、平聲。

〔語釋〕

○羣佞惑蔽——多くの佞臣に心が蔽われて惑うこと。○權臣——權勢のある臣下。

(60) (61) 〈懷信佗僚 忽乎吾將行兮〉

言己懷忠信、不合於衆、故悵然住立、忽忘居止、將遂遠行之它方也。一無忽字。

〔訓讀文〕

言ふところは、己忠信を懷へば、衆に合せず、故に悵然として住まり立ち、忽として居止するを忘れ、將に遂に遠く行きて它方に之かんとするなり。一に忽の字無し。

〔語釋〕

○悵然住立——失意の様子で佇むこと。○忽忘居止——ぼうつとして動くこともできないでいること。

(62) 〈涉江〉

此章言己佩服殊異、抗志高遠、國無人知之者、徘徊江之上、歎小人在位、而君子遇害也。

〔訓讀文〕

此の章は、言ふところは、己れの佩服殊異にして、抗志高遠なれども、國に人之を知る者無く、江の上に徘徊し、小人位に在りて、君子害に遇ふを歎ずるなり。

〔語釋〕

○佩服殊異——帶びものや衣服が非凡なほど立派である様子。○抗志高遠——志を高く保ち屈せぬこと。○徘徊江之上——水辺を当てもなくふらふらとすること。○小人在位——取るに足らぬ者が登用されること。

※『楚辭補注』譯注稿(三十四)に續く。

(本號擔當者：中山ひかり・木村剛大・今瀬英一朗・羅頤・名越健人)